
サンセファールの聖なる乙女

如月 みつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サンセファールの聖なる乙女

【Zコード】

Z2152W

【作者名】

如月 みつき

【あらすじ】

『見つけた。我が聖なる乙女よ』

唐突な囁きと共に、意識はふつりと闇にのみこまれた。
ふと気付けば、見覚えなんて全くない石造りの床。

ロゼクラート王国の地方都市、ブルグドルフェリにあるサンセフ
アール神殿とやらにたたずむ私。

「ちょ、ちょっと待って！ 聖なる乙女って誰？ エ……私っ！？」

桜川 凜々子。三十歳。独身。

聖なる乙女として、ロゼクラート王国に召喚されてしまったよう

です。

プロローグ

むせかえるような濃い花の香りが室内に満ちていた。>b r <
石造りの冷たい床には、仄かに光る円形の紋様 魔方陣 が浮
かび上がっている。そして中央には上半身裸の青年が立っていた。
>b r < 露わにした肌にも魔方陣と同様の文様が朱色で描かれて
いる。伏せていた瞼を持ち上げると、海のように深い青の瞳が現れ
た。>b r < 「どうしてもなさねばならぬのですか」>b r < 薄
く開かれた唇から苦々しい声音が漏れる。だがしかし、その声には
口にした台詞を裏切るような諦めが滲んでいた。>b r < 「まだ言
うか。そなたが一番それを知つておらう?」>b r < しつとりと
した艶のある低音が呆れたように青年に向けられた。部屋の隅、魔
方陣の外にたたずむのは、青年とよく似た面差しの男だった。純白
の長衣をまとい、金糸の刺繡が施された腰帯を締めた男は、そのた
たずまいや装飾品から高貴な身分であろうことが推測される。>b
r < 男の言葉を受けて、青年はわずかに眉をしかめてから再び瞼
を閉じた。やがて青年の唇から、歌うような泣くような言葉になら
ない言葉が溢れだす。すると円形の魔方陣が徐々に光を強め、辺り
を照らしていく。>b r < >b r < やがてまばゆいくらいの光が
部屋中を満たし、青年のかたわらに別の人影が姿を現したのである。

イケメン変質者

今日はわたし 桜川 凜々子 の誕生日。>b r < 祝つて
くれる恋人も無く、友人達は婚活、デートに妊婦さん。>b r <
まあ、この年になつたら、それも仕方ないかと思うけど、なんだか
モヤモヤする。>b r < この年。ええ、そうです。わたし
の度三十歳になりました！ お同様街道まつしぐら……つて、あは
は……。>b r < いつちょ、ぱーつとやりますかつてことで、松
坂牛のサーロイン（一百グラム）をお買い上げ。ざわつく心を食欲
で誤魔化しつつ、誰が待つでもない家へと急いでた。>b r < 五
年前に引っ越したわたしの家は、駅から徒歩十分で、築十年の五階
建てマンションの三階だ。気ままなひとり暮らしも早十年。ここま
でくると“ひとりは寂しい”から“ひとりは楽”に変わるものなの
です。>b r < あと一分ほどでマンションに着くところで、
いきなり、本当にいきなり、足元が真昼みたいに明るくなつて、あ
まりの眩しさに右腕を上げて両手を覆つた。>b r < >b r <
『 見つけた。我が聖なる乙女よ』>b r < >b r < 唐突に耳
元で聞こえた囁きが、わたしに異変を自覚させてくれた。どこから
か濃厚な花の香りが漂つてくる。その香りにあてられてか、こめか
みがズキズキと痛む。>b r < めぐらましのようなフラッシュに、
意味不明な男の声。そしてきつ過ぎる香り。>b r < 変質者か何
かかと思い、両目を覆つっていた右腕を下ろしたわたしの目に映るの
はアスファルトの黒じやなく、何故か灰色がかつた地面（石造りの
床）だった。>b r < >b r < 「……へ？ ナニコレ」>b r <
b r < 我ながら間の抜けた台詞だなと思いつつも、想定外の状況
に思考が追いつかない。>b r < 仕事の帰りで、マンションはす
ぐそこで、左手には奮発した誕生祝いの松坂牛……つて、あれ?
違和感に恐る恐る視線を動かす。ない。なーいつ！ 左手にぶら下
げていたはずの松坂牛がっ！>b r < >b r < 「ちょ、どうしてく

れんのよ……わたしの可愛い松坂牛！」
違つんじゃないの、ともうひとりの自分が突つ込みをいれてくるけれど、この状況下で唯一理解できること 松坂牛の紛失 へと現実逃避をはかつてしまつ。勢いよく顔を上げた拍子に、見てはいけないものを見てしまった。
朱色の刺青（？）でびつしり覆われた上半身をさらした若い男が、すぐそばにいたのだ。
出たな変質者、と内心で罵声を浴びせつつ、全力で逃げだそうとするけれど、足がぴくりとも動かない。
どうしようか焦つて いるうちに、変質者が距離を詰めてくる。そつとおどがいを持ち上げられ、恥恥なく目を合わせる羽目になる。
シヤープな顎のラインに、薄い唇。すつきり通つた鼻筋に、長いまつ毛。
要するに芸能人もびっくりのイケメンなのだ、変質者のくせに。
何よりもその有り得ない色彩に、目を奪われる。
長い銀の髪は、さらさらと音を立てそうなほど艶やかで、とても染めているようには見えない。深い海の色をした瞳は、最高級のサファイアすら霞んでしまいそうなほど美しい。
常識を超越した美貌に、相手が変質者であることも忘れて見とれてしまう。
「…………？」 その麗しい顔がゆっくり近付いて……唇に柔らかいものが押しつけられた。

出でい頭の……

唇の上を生温かいモノがはこすり回つてゐる。あまりの不快感に吐き氣すらじってきた。>b r < ^ b r < 「んー。んーんんつ！」>b r < ^ b r < 男から離れようと身をよじるけれど、がつちりと押さえ込まれていてびくともしない。>b r < なにコイツ、サイテー。イケメンだからって何してもいいとか思つてんじゃないわよつー> b r < ジの変質者、絶対訴えてやるーわたしのファーストキス返せーー> b r < 齒を食い縛つて、せいぜい心の中で罵詈雑言を浴びせるへりいしかできないのが情けない。ようやく唇が離れたかと思つたら、『甘い』といつ、うつとりとした男の咳きが耳に入る。>b r < 意味がわからない、と眉をしかめ、唇に残る生々しい感触を消そうと、手の甲でグイグイ拭う。>b r < みんなのがファーストキスだなんてあんまりだ。ノーカウント。そつ、ノーカウントでいいだろ？。あれだ、交通事故に遭つたようなものだと思うしかない。>b r < ^ b r < 「勝手にキスしてんじゃないわよ。わたしのファーストキス、どうしてくれんのよー！」>b r < ^ b r < ど、怒鳴つてやりたいところだけど、この年でキスもまだだつたのかと侮られるのも癪なので、それは言わないでおくことにする。>b r < いつまでもガシガシと唇を拭うわたしを見て、男の秀麗な顔に憂いが滲む。>b r < くそう、そんな顔したつてダメなんだから。絶対、絶対許さないんだからー> b r < ぐつと奥歯を噛み締め、わたしは男を睨みつけた。>b r < ^ b r < 「聖なる乙女」よ、我らは貴女をお待ちしておりました」>b r < ^ b r < すつ、と男が膝を付き、わたしの手の甲に唇を押し当てる。>b r < 瞬時に肌が粟立つた。つかまれた手を振り払うと、鳥肌の立つ腕を撫でさする。>b r < ^ b r < 「意味わからん。なにが“聖なる乙女”よ、頭おかしいんじゃない。もうちょっとでマンショングリだつたのよー。こきなり現れて何なのよ。誕生日だから奮發

第二三者

「ラルフ＝サルフホートと申します」
微笑みを浮かべて、第三の人物が名乗りを上げる。四十代半ばくら
いだろうか。変質者と同じ銀の髪をしていて、色調は少し違うけれ
ど青い目をしている。
上下白の衣装を纏い、金糸の刺繡
が施された腰帯を締めている。床を掃く純白のマントを留める飾り
も、キラキラと輝く金色だ。ピカピカしているそれらが本物の金だ
としたら、きっとものすごく高価だ。とすれば、この人は身分のあ
る人なのだろうか。
黙つても何も解決しない。わたしは意を決してラルフさん
に話しかけた。
「何でしょつ。『聖なる乙女』」
「黙つても何でしょつ。『聖なる乙女』」
またしても“聖なる乙女”ときた。やっぱりそ
れはわたしを指す呼称のようだけど、きっと人違ひに決まつていて
だいたい乙女なんて年齢じゃないし、“聖なる”と称される清らか
な体でもない。
「その呼び方、やめてください。
人違ひに決まつてますから。わたしの名前は桜川 凜々子。こちら
流に言うと、リリコ＝サクラガワです」
様、ですか。貴女に相応しい愛らしいお名前ですね」
「人違ひ云々はさらつと流し、まるで口説き文句のようなこと
を言つてくる。
いやいやそこ流さないでくださいよ、と心の中
で突つ込みつつ、わたしは棒読み台詞で一應御礼の言葉を述べてみ
た。
「これはアレン＝サルフホート。わたしの息
子で“神の器”と呼ばれる者です」
ラルフさんは変質者を指してにこやかに笑つていて。何となく似てゐるなあ、
とは思つたけれど、まさか本当に息子だつたなんて驚きだ。親子し
て一体何を企んでいるのだろう。
「はあ」
曖昧に頷きつつ、何で笑つてられるかなあこの人、

と思ひ。だつてさあ、自分の息子がだよ、初対面の相手に無理矢理キスしてんだよ。普通止めるよね。うん、絶対止める。知らなかつたならまだしも、“聖なる乙女”って呼ぶくらいだから、一部始終見ていたはず。ほんと、信じられない。わたしのラルフさんに向ける視線が、どうしても冷たいものになつてしまつのは仕方ないと思う。>b_r^> b_r^< 「色々お聞きになりたいこともあります」、場所を移しましょ。アレン、そなたは着替えを済ませてきなさい」>b_r^> b_r^< 「さあ、こちらへ」と促され、ヒールの踵を鳴らしながら、ラルフさんその後へ続いた。

ラルフさんが淹れてくれたお茶を口に含むと、仄かに林檎のよくな甘酸っぱい香りがした。>brv あー、何だかほっとする。少しだけ気分が落ち着いたわたしは、ぐるりと室内を見回した。あの部屋からほんの少しだけしか離れていないけれど、雰囲気が違うだけでこうもりラックスできるものかと思う。床は焦げ茶色の板張りで、シンプルな応接セットが置いてあるだけだ。ソファーアのクッションは硬くもなく、かといって柔らか過ぎもせず、適度に体重を受け止めてくれる。色も深みのある縁で、田に優しい癒し系だ。ランプのような照明器具が壁やテーブルの脇に立てかけてあって、穏やかな光が灯されている。>brv>brv「少しさ落ち着かれましたか?」>brv>brv>brv「ええ、まあ」>brv>brv>brv 馴染み深いお茶を口にしたことで、気持ちがいくらか解れたわたしはこくんと頷く。>brv>brv>brv「ここはどこですか? 聖なる乙女つて何なんですか? わたし、家に帰りたいんですけど」>brv>brv>brv 手にしていた花柄のカップをソーサーに戻し、まずは置かれた状況を把握しようと質問する。ぎゅっと両手を握り締め、真っ直ぐにラルフさんの青い目を見つめる。彼の言葉に嘘があれば、すぐにわかるように。>brv>brv>brv「リリコ様が今おられるのは、ロゼクラート王国の地方都市、ブルグドルフェリにあるサンセファール神殿です」>brv>brv>brv カタカナばかりの国名や地名に、聞き覚えのあるものはない。しかもサンセファール神殿など、聞いたこともない。予感はしていたものの、落胆は大きかった。>brv>brv>brv>brv「どうしてわたしがここに?」>brv>brv 薄々わかっているけれど、はつきり相手の口から聞かなければ諦めきれない。だからわたしは敢えてその質問を口にした。>brv>brv>brv“聖なる乙女”として、我々がリリコ様を召喚したからです「>brv>brv>brv あー、はいはい。召喚ですか。>brv

「はた迷惑なことだとつづくと思つ。こちらの都合を聞きもせず、異世界召喚なんて言語道断だ。これつて誘拐とかより性質が悪いと思いませんか？ だって自力で帰る手段はほぼ皆無なわけです

からね！」>b r < b r < 「あの、失礼ですけど人違にじゃありませんか？ わたしは何の取り得もない、普通の人間ですよ」>b r <

「こりと嫌味なくらいあからさまな作り笑顔を浮かべてやつた。>b r < 特殊能力なんてないし、愛と正義と希望なんて人並み以下しかありません。まして勇気なんてひとかけらも持ち合わせてませんから！」>b r < b r < 「それは有り得ません。

サンセファール神が自らの乙女を見誤るなど、ありませんから」>b r < b r <

ラルフさんの断言に参つたなあと思つ。>b r < だつて全然納得いかない。十六、七くらいの超絶美少女（もちろん清らか）だつたら、聖なる乙女ですよって言われても、何となく納得できると思う。でも年齢三十、容姿も至つて平凡のわたしに言われても、何だかなあとモヤモヤするだけだ。>b r < b r <

聖なる乙女に選ばれる条件とかつてないんですか？」>b r < b

「ところで、わたしは切り口を変えてみた。>b r < も

し条件とやらがあれば、そこから外れているとこうことをアピールして、お役御免つてことにしてもらおうと思ったのだ。なのに……。

>b r < b r < 「条件？ そのようなものございません。全てはサンセファール神の思し召しにござります」>b r < b r < 若干驚いた顔をしつつ、ラルフさんはまたも言い切つた。>b r <

全ては神の思し召し。>b r < ナニ、ソレ。人選間違つてんじゃないわよ！ >b r < わたしは存在すら疑わしい神とやらを思いつ切り罵つてやつた。もちろん、心の中で、だけだ。

まずは聖なる乙女がどのような存在なのか、知つていただかねばなりませんね。>b r < そう言つて、ラルフさんは語り出した。

>b r < 現実味のない、おどぎ話のような話を。>b r <>b r

<

>b r <>b r < 神々が人の肉を捨てて、展開へと旅立たれた後のことです。>b r < 神々がそこここに残していく神気は、時の流れと共に失われ、次第に魔物達がその行動範囲を広げていったのです。>b r < 小さな村や町は魔物の襲撃に遭い、人間達は少しずつその数を減らしていきました。ついには大きな町や都市にも魔物は姿を現し始め、略奪と殺戮を喜々として行つようになりました。>b r < そんな折、世界の片隅でひとりの乙女が祈りを捧げていました。乙女には魔物を滅ぼす聖なる力や、飢えに苦しむ人々に与える食糧を調達する資金もありません。彼女にできるのはだたひたすらに祈ることのみでした。>b r < いるはずのない神に祈るなど、なんて馬鹿な娘だと、周囲の人々は乙女に冷ややかでした。 もう神の存在を感じる心など、とうの昔に失われていたのです。>b r < しかし他者のために捧げるその真摯な祈りは、いつしかひとりの神の元へと届くのでした。その神の名はサンセファール。かつて月神と呼ばれていたものです。>b r < 清らかな魂が放つ光に、眠りから覚醒しつつあつたサンセファール神は、人界の様子に心を痛めました。光あふれる穏やかで満ち足りた世界だつたはずなのに、今は闇に覆われ、一筋の希望さえも見出せないような有様だつたからです。>b r < 何とかしたい、そう思うサンセファール神でしたが、肉の器を脱ぎ捨てた状態で、魔物を一掃するような強大な神の力を揮えれば、人界を救うどころか、破壊してしまいかねません。ですから、神を宿すことのできる肉の器つまりは人間を探さねばならなかつたのです。>b r < サンセファール神は、乙女の夢に姿を現し、そのようなことを告げました。乙

女はその言葉を信じ、たつたひとりで旅にでました。苦難の果て、ようやく神の器たりえる人物を探し出し、サンセファール神をその肉体に降臨させることに成功したのです。>b r < 神の発する気は凄まじく、瞬く間に魔物は駆逐され、人界に安寧をもたらしました。そして乙女は“聖なる乙女”と呼ばれるようになり、サンセファール神の声を聞く者として、崇拜されるようになつたのです。

>b r < それ以降“神の器”たるべき人間に降臨するサンセファール神は、その時代に生きる女性の中から“聖なる乙女”を選び、こうして神の声　すなわち力は、絶えることなく人界に届けられるようになつたのでした。>b r < >b r < >b r < >b r <

b r < 長い話を聞かされても、わたしには何の感慨もわかなかつた。神様なんでものの存在がまず信じられないのだから仕方ない。ラルフさんは実話だというけれど、きっと都合のいいように色々と脚色されていて決まっている。>b r < >b r < 「初代の“聖なる乙女”と“神の器”が、ロゼクラート王国とサンセファール神殿の祖となられたのです」>b r < >b r < 胡散臭いなと思つたのが伝わつてしまつたのか、ラルフさんが苦笑しながら付け加えるように言った。>b r < >b r < 「つまり“聖なる乙女”というのは、サンセファール神の声を届ける役目を担うということですか？」>b r < >b r < 伝説の昔語りを聞いても、いまいち乙女の重要さがわからない。>b r < >b r < 「ええ、まあ、そのようなものです」>b r < >b r < 「だったら“神の器”さんだけで十分なんじゃないですか？」ある程度体の自由があれば、神の力を引き出すことも可能でしょう」>b r < >b r < 歯切れの悪い返答に嫌な予感を覚えつつ、わたしはさらに突っ込んで聞いてみた。>b r < >b r < 「“神の器”とはあくまで器。サンセファール神がこの地をお守りくださるのは、“聖なる乙女”的存在があればこそ、なのですよ」>b r < >b r < ナンダ、ソレ。>b r < わたしは思いつ切り眉間に皺を寄せた。

「え、ちよ、待ってくださいよ。じゃあ、もし“聖なる乙女”がないと、どうなるんですか?」>b r < ^ b r < 「神は降臨なさらず、器に蓄えられた神氣は徐々に薄れ、やがて失われるでしょう」>b r < ^ b r < 「……すると、魔物とやらが暴れる?」>b r < ^ b r < 「そうなります」>b r < ^ b r < そこまで会話して、わたしはふと気が付いた。“聖なる乙女”なんて呼ばれているけれど、つまりは神様へ捧げられる生贊(?)のようなものなんじゃないか。そうなると、器に宿つた神様は手に入れた乙女に何を望むのだと。>b r < ^ b r < ……恐ろしくて聞けない。>b r < ^ b r < 「こにはひとつ何も気付いてない振りをして、何とかして“聖なる乙女”から逃れないで。」>b r < ^ b r < 「えーと。そんなこの世界を守るようなスケールの大きな役目なんて、異世界人のわたしには到底無理ですよ。もっと探してみたらどうですか?」きつと適任の方を見逃してるだけですって」>b r < ^ b r < 酷いと言わゆるが、異世界人のわたしに、この世界のために犠牲になるいわれなんてない。いきなり召喚されただけでも迷惑なのに、これ以上厄介な事に巻き込まれるなんて真っ平御免だ。>b r < ^ b r <

“聖なる乙女”はリリ口様、貴女なのです。器に降臨された神自らが貴女を見出したのですから、人違いなどとこことは有り得ません」>b r < ^ b r < いつまでも悪あがきをするわたしに、ラルフさんは悲しそうな目をしながらも断言してくれた。でも、はいそうですか、わかりましたなんて、とてもじやないけど思えない。どうしてわたしが、という憤りが強過ぎて、手のひらに爪が食い込むほど拳を握る。>b r < ^ b r < 「過去に異世界から“聖なる乙女”として召喚された方が一名いらっしゃいます」>b r < ^ b r < その言葉に、わたしは知らずうつむいていた顔をゆっくり上げる。>b r < 自分と同じ境遇に陥った人が一人もいたんだ。>b

「ぐくりと喉を鳴らし、神妙な面持ちでラルフさんを見た。握り締めた拳に嫌な汗がにじむ。」
「那人達は元の世界へ帰れたんですか？」
「ひょっとしたら、とう思いで放つた問いかけは、無残にも打ち消された。」
「いいえ。お一方ともこの国で一生を終えられました」
「帰れない。いや、帰さなかつたのか。」
「この国は、サンセファール神は、死ぬまでわたしを離してくれない。田の前が真っ白になり、ただ茫然とラルフさんの顔を見つめるのだった。

ひとりぼっち

「少し休憩されてはいかがですか」>b r < >b r < 気遣うよつ
な声に、わたしは読んでいた本から目を上げた。>b r < ふと、
いい香りに振り返れば、焼き菓子とお茶が用意されている。もう午
後のお茶の時刻になつたのかと、目頭を押さえて、凝り固まつてし
まつている皿の筋肉を揉みほぐす。>b r < >b r < 「あつがとう。
エドナさん」>b r < >b r < と、休憩を促してくれたエドナさん
にお礼を言つてから、大きく伸びをした。パキパキと鳴る関節に、
眉をしかめる。>b r < ヤダ、もう。これじゃあ年寄りだ。>b
<b r < >b r < 「エドナさんも一緒にお茶しようよ。わたしのお
願い、聞いてくれるよね？」>b r < >b r < 心細そうな顔をす
れば、エドナさんは困った様子を隠しもせず、しぶしぶだけど同席
してくれる。>b r < エドナさん、とここのは、ここのサンセファ
ール神殿に仕える女性神官で、魔法の使い手だ。>b r < ここの世
界にはファンタジーには付き物の、魔法が存在する。幾つかの系統
があるらしいけど、彼女は光の魔法に優れているのだとか。>b r
< 二十五歳。独身。わたしと同じ黒髪だけど、長さは腰の辺りま
である。>b r < お手入れ大変そう。>b r < 肩より少し長い
だけのわたしでも、毛先がすぐに痛んだりするのだから、そりやも
う大変だろうな、と思うのだ。>b r < ラルフさんと同じような
ゆつたりした白の神官服を身に着けているけれど、腰帯の締められ
たウエストは細くて、フルフルと揺れる胸元はかなり豊かだ。つて、
つい親父目線になっちゃつてるよ。というわたしの服装も、彼女
と同じものにしてもらつてている。最初、やたら肩やら背中やらの露
出が激しいドレスのようなものを持つてこられたのだけれど、それ
は丁重にお断りした。だいたいそんなのが似合つよつな、ボン、キ
コツ、ボン、の体型じゃないし。>b r < そんな彼女が、何故だ

かわたしの世話役に選ばれたらしい。本人はそのことに不満はなく、
“聖なる乙女”であるわたしの（甚だ不本意だけど）世話ができる
とあって、嬉しいようなのだ。>b r < 最初の頃はお茶に誘つて
も平身低頭、固辞するばかりで取りつく島もなかつたけれど、近頃、
どういえば彼女の首を縦に振らせることができるのががわかつてき
た。>b r < それがこの「わたしのお願い、聞いてくれるよね？」
攻撃だつたりする。>b r < どうも上方から（きっとラルフさ
んだとと思う）、「聖なる乙女」の願いはできるだけ叶えるようにと、
言われているみたいだ。それをわかつていて、わざと「お願い」な
んて言つちゃうわたしは、かなり性格が歪んできたかも。でもそれ
もこれも、異世界で生き抜いていくためには仕方ない。味方なんて
誰もいない。この世界でわたしは、正真正銘のひとりぼっちなんだ。
>b r < >b r < 「まだお読みになられているのですか？」>b r
>b r < >b r < ちょっとだけ暗い気分になつたわたしに、エドナさん
がおずおずと話しかけてきた。机の上に積み上げた本を振り返り、
にっこりと笑う。>b r < >b r < 「うん。だつて何にもわからな
いんだよ」>b r < >b r < 情報は少しでも多い方がいいに決ま
っている。わたしが熱心に読んでいるのはこの国 ロゼクラート
王国 の建国史や、歴代の“聖なる乙女”に纏わる記録などだ。
>b r < 召喚された直後はプチパニックに陥つていたから気付か
なかつたけど、言葉が通じるつていうのはありがたかった。何気な
く手に取つてみた本を開いてみたら、文字自体はミニズが違つたよ
うにしか見えないのに、目で追つと脳内で変換され、その内容が日
本語として頭に入つてくるのだ。>b r < このことだけに限定す
れば、神様に感謝してもいい。サンキュー、サンセファール神。わ
たしを“聖なる乙女”に選んだことは、絶対に許してやらなければ
ね！>b r < この國の人達が聞いたら、間違いなく卒倒するだろ
うことを考えつつ、正面に座るエドナさんにちらりと目を向いた。

決められた未来

「エドナさんのおかげだよ。神殿の図書館へ連れてつてくれたから、こりして暇つぶしができるんだよー」
「いいえ、わたくしなど何も。少しでもリリコ様のお役に立てればと、思つてはいるのですが……」
「はにかみながら瞼を伏せるエドナさんは、とつても可愛らしい。男性神官からの人気も高いんだろうな、と少しばかり不謹慎なことを考えてみたりする。
「いや、でもほんと。図書館に行つたことは収穫だった。歴代の“聖なる乙女”的記録が、事細かに記された本が保管されていたんだもん。貸出オッケーってことだから、即借りて、貪るように目を通した。」
その結果、彼女たちに共通点というものが全くないということがわかつた。年齢・出身地・髪の色・目の色・体型。どれに注目しても、てんでバラバラだった。最年少は五歳で、最年長は六十歳と、年齢もびっくりするほど幅広い。条件なんて本当にないのだと、思い知らされる結果となつたのだ。
「でも“聖なる乙女”として選ばれた彼女らの未来には、ひとつだけ共通点があつた。彼女らは皆、正妃として王宮へ迎え入れられていたのだ。見目麗しいうら若い乙女なら、王様や王子様が恋に落ちたとしても不思議はない。でも五歳とか六十歳つて、どうよ？」
たまたま当時の王様や王子様が、ロリコンに熟女好きだったとか？
そんな偶然あるわけない。
「聖なる乙女」＝正妃。この図式は決定事項と考へるしかない。ということは、ぼやぼやしていたら、わたしも正妃にされちゃうのかな。あはは……冗談キツイ。
それが名ばかりの正妃だったまだしも（過去には五歳やら六十歳もいたわけだし）、もし、名実共に正妃としての務めを強要されたら……。そこまで考へると、ぶるりと寒気がした。
「若くもない。美人でもない。だから大丈夫と信じたい。でもわたしには大きな特徴がある！　だってわたしは異世界人。物珍しさが勝つて、

興味本位で……とか有り得る。有り得るよねっ！ 嫌だ。絶対ヤダ
ツ！一！> b r < > b r < 「そんなの絶対いやっ！」> b r < >
b r < うかり口にしてしまって、エドナさんをオロオロさせて
しまった。> b r < 「ごめん、エドナさん。貴女に罪はないんだよ。
うん、とってもよくしてもらってる。> b r < そう、悪いのは神
様。わたしを呼び寄せたサンセファール神なんだから！> b r <
そしてふと思つ。“神の器”として選ばれた変質者　いや、アレ
ンさんだっけ。彼は自分が選ばれたことをどう思つているのだろう
か、と。

「ロゼクラート王国に召喚されてから、十日ほどが過ぎた。」
聖なる乙女関連の本は読み尽し、あとはエドナさんに頼みこん
で、この世界のことを少しづつ教えてもらひ田々が続いている。エ
ドナさんは礼儀作法や衣装についてなど、日常的な常識について、
ラルフさんにはロゼクラート王国やその他の国について教えてもら
っている。」
「そうそう、ラルフさんってば、このサンセフ
アール神殿の神官長だつたんだよね。つまりはここ

てすつじぐ強かつたりするの?」
「アレン様を退けるくらになら、お任せください」とか言いだした。
うして、どうやって!?

「……ウソ。なんで、どうしたのは束の間で、徐々にわき上がる熱に浮かされるよ!」
わたしはエドナさんに詰め寄った。いつもと違う様子に、腰が引けてる彼女の腕をつかみ、さあ、吐け、とばかりに、田に力を込める。
「光の攻撃魔法で、なのですけれど……。あ、でも一般の方にそのようなことは致しません。そんなことをすれば、冗談では済まないよつな状態になってしまいますので」
「……」
つて言ひ募るエドナさんの話を要約するところだ。
“神の器”であるアレンさんは、やはりとこりうか当然というか、どんな系統の魔法に対しても耐性があるのだそうだ。そのために、一般人なら到底受けきれない攻撃魔法が直撃しても、その効果は半減され、かすり傷くらいで済むらしい。
「……理論上は。」
便利だなあ。わたしも魔法使えないかなあ。そしたら易々と力で屈服させられるなんてことにならないのになあ。
「わたしも魔法を使えるようにならないかな?」
あの、わたくしでは心許ないのでしょうか? でもわたくし、リリコ様のためならこの命、少しも惜しきはありません」
「ダメもとで聞いてみたんだけど、半泣きになってしまったエドナさんに慌てて手を振る。
「え、そういう意味じゃないよー。向こうの世界じゃ魔法なんてなかつたからさ、もしわたしにも使えるんだつたら、使ってみたいなあつて思つただけ。あのね、エドナさんることは頼りにしてるし、信じてるよ? だからそんな顔しないでよー。でも命は大事にしてね。命懸けられたつとした好奇心だったのに、大事に発展してるのはどうしてなのよ

！>b r < エドナさんの、命懸けます、発言にビビリつつ、わたしはやんわりと妙な覚悟をたしなめた。“聖なる乙女”が大事だからって、目の前で人の死ぬところなんて見たくもない。平和ボケした日本人であるわたしには、とてもじゃないけど耐えられないと思う。そんなことになつたら、精神的におかしくなつてしまふかも知れない。>b r <>b r < 「えつ、あつ、そうなのですか？ 申し訳ありません。わたくし、えつと、あの……ラルフ様に相談してみます！」>b r <>b r < 涙で潤んだ目をクルクル動かし、エドナさんは真っ赤になつてペコリと頭を下げた。>b r < そんな仕草も可愛いなあ、と思う。世俗から隔離された神殿という特殊な場所で生きてきたから、きっとこんなに純粋なんだろうと思う。変な虫が付かないように、このわたしが目を光らせておかないと。なんて、おやじ臭い思考回路に陥つてしまつわたし。かなりヤバイよね、この状態。>b r < たはは、と乾いた笑いを漏らしていると、いきなり部屋の扉が開け放たれ、ずかずかと人が入ってきた。>b r <>b r < 「誰！？」>b r <>b r < 基本的にラルフさんかエドナさんしか訪れる事のない部屋に、突然現れたのは、きらきらしい金の髪をした青年だ。整つた精悍な容貌に、がつしりとした体躯。若葉のような瑞々しい翠の目が細められる。>b r < わたしの発した問いかを綺麗に無視して、青年は腕を伸ばしてくる。>b r <>b r < 「…………！」>b r <>b r < ぐいっと引っ張られ、倒れそうになつたわたしは、何すんのよ、と言いかけて……言えなかつた。>b r < あらうことか、突然現れた正体不明の青年の唇が、わたしのそれに重ねられてしまつたからだ。

未来の夫

パシッ、という乾いた音が室内に響く。> b r < またしても出会い頭にキスされてしまったわたしは、唇が離れた瞬間、反射的に青年の頬を思い切り叩いた。一瞬、虚を突かれたような顔をした青年だったが、すぐに顔を上げ、不敵に笑う。> b r < ロイツ、ちつとも反省してない。> b r < カツ、と頭に血がのぼったわたしは、弾丸のように言葉を放つ。> b r < > b r < 「この国の男つていうのは、初対面の相手にいきなりキスするつていうのが礼儀なわけ!? ほんとに冗談じやない。ふざけるのもいい加減にしてっ！」> b r < > b r < キツ、と睨み付けてやる。> b r < > b r < 「お下がりください。リリコ様の許可なくそのお体に触れること、どのような御身分の方でも許されません」> b r < > b r < わたしと青年の間に体をねじ込んだエドナさんが、声を張り上げる。心なしかその声が震えているように聞こえたのは、気のせいじゃないはずだ。> b r < > b r < 「神官風情が……。このわたしに指図するとはな。……貴様、死にたいようだな」> b r < > b r < 「リリコ様のお側に仕えるからには、死は覚悟のうえ」> b r < > b r < ちょ、まつ、待つて!! なに勝手に盛り上がりつてんのよつ！ なにこの時代劇みたいな展開は！> b r < 何だかわからないけど、エドナさんが圧倒的不利ということだけはわかる。てか、この青年は誰なんだ？> b r < > b r < 「エドナさんに何かしたら、絶対許さないんだからね！」> b r < > b r < ヤダ、ヤダと思いながらも、わたしのために震えながら立ち向かってくれている彼女の力になりたくて、眼差しにありつたけの覚悟を乗せて、青年をひたと見据える。> b r < > b r < 礼儀知らずはどちらだ。未来の夫に刃向かうとは……教育のし甲斐があるというものだな」> b r < > b r < 「はいーっ!? この人今なに言いました？ さらつと大事なこと仰いましたよ。> b r < > b r < 未来の……夫」> b r <

♪ ♪ ♪ ♪ ポカソとするわたしを面白やうな目で眺め、青年は素早くエドナさんの両手を捕らえると、ひとまとめにして背中の方へ捻り上げる。♪ ♪ ♪ テーブルに上半身を押しつけられ、長い髪が乱れて細い体に纏わりつく。♪ ♪ ♪ ♪ ♪ 「……くつ」 ♪ ♪ ♪
♪ ♪ ♪ ♪ その横顔は蒼白だ。それでもエドナさんは悲鳴ひとつ上げない。見ているこちらが泣きたくなつてくる。♪ ♪ ♪ ♪ ♪
♪ 「女の子に乱暴するなんて、最低よっ！」 ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ 何もできず指をくわえて見ているだけの自分にひどく腹が立つ。悔しくて、悲しくて、噛み締めた唇が切れたのか、血の味がする。♪ ♪ ♪ ♪ ♪ 「陛下！」 ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ 「お兄様！」 ♪ ♪ ♪ ♪ ♪
♪ ♪ ♪ ♪ ♪ そんな時、開け放しだった扉から、男女の声が聞こえた。♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ハツとして視線を向けると、少し慌てたようなラルフさんと、こんな荒っぽい場面に不似合いなヒラヒラ、フリフリのドレスを着た可憐な美少女がいたのだった。

ラルフさんの登場で一気に気が緩んだわたしは、へナヘナとその場に座り込む。^b r ^b r ^b r 「何とこい」となさるのですか。その者の手をお放しください、陛下」 ^b r ^b r 落ち着いた声音の中に、咎めるような響きが感じられた。でもラルフさんつてば、この暴力男のことを“陛下”って呼んだような……。^b r ^b r ^b r 「この者はわたしに刃を向けたのだぞ。それがどのような意味を持つのか、知らぬとでも言つのか」 ^b r ^b r この滅茶苦茶上から田線の台詞と、わざわざのラルフさんの“陛下”といふ呼称から導かれるのは、この暴力男がロゼクラート王国の国王陛下だという解でしかない。ということは、わたしがひっぱたいたのは国王の類で……。^b r ひいーーー！ ピビビ、ビうしょう。怒りのあまり、我を忘れてやつちやつたよお。不敬罪とかで牢屋に入れられちゃう？ いやいや、まさか処刑されちゃうなんてことは……ない、よね？ ^b r 内心ビビリまくるわたしは、きつと顔面蒼白だったに違いない。血の氣の失せたわたしの顔と、未だ拘束されたままのエドナさんに視線を走らせたラルフさんは、ものすゞく男前な台詞を口にした。^b r ^b r 「この者は神官長たるわたしの命に従つただけ。全ての責は、このわたしにあります」 ^b r ^b r キヤアー、素敵！ 素敵過ぎますラルフさんっ！ ^b r わたしは両手を胸の前でしっかりと握り締めた。この場面で、しかも国王陛下に対して、こんなにはつきり言えるなんて立派だよ。横柄で乱暴なコクオウサマとは、器が違うよ。天と地ほじね！ ^b r だつてさ、神官長と国王陛下じや、陛下の方が権力者だよね。それなのに自分の保身に走るんじゃなく、部下であるエドナさんを守るのとするなんて、すごいことだと思つ。一般社会には、こんな人殆どいない。上司つてものは、平氣で部下を切り捨て、保身を図るものなんだからさ。^b r ^b r 「お兄様、

あんまりですわ。わたくし、失望致しました」
ラルフさんと一緒に来ていた可憐な美少女が、憤慨した様子でその
薔のような唇を開いた。そしてエドナさんを拘束する陛下の手をつ
かむと、ピシリ、と呴ぐ。
「兄が酷いことをして、
ごめんなさいね」
「……殿下」
拘束を解かれたエドナさんの手首を、美少女 殿下？ は申し
訳なさそうな顔をしてさすつていて。
「それを咎めるように、陛下が彼女の名を呼
ぶ。それを完全無視したリー・シユ様は、わたしの方へと身を寄せて
きた。
「リリコ様、お怪我はありませんか？」
大きな目は真夏の植物を思わせる生命力に満ちた
翠色で、いきいきとした輝きを放つていて。ゆるくウェーブのかか
った栗色の髪は腰の辺りまでの長さがあり、華奢な体にフワフワと
纏わり付いている。ファンタジーな世界だから、森の妖精です、と
か言われても信じてしまいそうなくらい、可憐な少女だと思う。間
近でのぞき込まれると、同性だつていうのに、何だかドキドキして
しまう。
「聖なる乙女」を書するわけがないだ
ろ？
「お偉い「クオウサマ」が何か言つていて
れど、どうでもいいでしょ。目の前にいるリー・シユ様に釘付けのわ
たしは、無視を決め込んだ。
「あ、はい、大丈夫
です。ラルフさんの顔を見たら、何だか安心してしまって……腰が
抜けてしまったみたいで」「透き通るような白
い肌はきめ細かくて、羨まし過ぎる。こつちはお肌の曲がり角なん
て、こつこの昔に通り越してるんだからなあ。やつぱ、若いつてい
いねえ。はああ、と感嘆の溜息なんてついて、わたしはがつくり
とうなだれた。
「ラルフ。この方とリリコ様をお
願いします。わたくしはお兄様を連れて、アレン様のもとへ参ります。
そちらで事の次第を説明していただきますわ」
恭しくお辞儀をした。
「申し訳ございませんが、

よろしくお願ひ致します、殿下「へへへへへへ」よくつてよ、
とふんわり微笑んだリーシュ様は、わたしに向かつて「また改めて
ご挨拶に参りますわ」と言い残し、苦い顔をした陛下を連れて出て
行つた。

国王兄妹が出て行つたあと、ノロノロと立ち上がろうとしていたわたしに、ラルフさんが手を差し出してくれる。>b r < ^ b r < 「ありがとうございます」>b r < ^ b r < つかんだ手は大きく温かで、少しだけほつとする。衣服に付いた汚れを落とそうと、お尻から足元にかけて軽くはたき、エドナさんへと歩み寄る。>b r < ^ b r < 「どこか痛めでない？」>b r < ^ b r < 悲鳴こそ上げていなかつたけど、あんなに手ひどい扱いを受けたのだ。どこか痛めていたとしても、全然不思議じやない。>b r < ^ b r < 「わたくしは大丈夫です。それより、リリコ様こそ大丈夫ですか？」>b r < ^ b r < あちこち動かしながら眉をしかめているエドナさんに、逆に気遣われてしまつた。>b r < ^ b r < 「何言つてんの？ わたしは別に何もされてないから平氣よ。……それより、ありがとう。わたしを守るうとしてくれて」>b r < ^ b r < できるだけ明るく言って、にっこり笑つて見せる。わたしは平氣だと、あんなこと大したことじやないんだと、自分にもエドナさん達にも言い聞かせる。>b r < ^ b r < 「ねえ、ラルフさん。あの人……陛下だけ？ いつもあんな横暴な感じなんですか？」>b r < ^ b r < あれじや、まるきりの暴君だ。あれが通常の状態だったなら、周りの人間はたまんないよなー、と思う。わたしだつて二度と関わり合いになんてなりたくないつていうのに、自分は未来の夫だと言つていた。慣例というか何というか、過去を振り返れば“聖なる乙女”が、その時の国王の正妃として迎えられているけど、あんな人じや絶対に嫌だ。選択権が与えられるんだつたら、断固拒否してやるんだけどな。>b r < ないよねえ、選択権。>b r < はふ、と小さく溜息を落とし、陛下の容貌を思い返す。アレンさんはまた違つたタイプのイケメンだつたとは思う。どれだけイケメンだろうと、最高権力者だろうと、あれじやダメだ。無理だ。人の意

思を蔑にするようなヤツは、同じ人間とは認めてやらない。動物と同じ……いや動物以下だ。動物だって嫌がる相手に、無理強いするなんてことはないんだし、動物と同じだなんて言つたら、動物さん失礼だよね。うん。汗、涙、唾液などは、得も言わぬ芳香を放ち、口にすると蕩けるように甘いとか」えらく眞面目な顔をして、ラルフさんはとんでもないことを言い出した。どうと、嫌な汗が背中を滑り落ちる。つてか、この汗も“得も言わぬ芳香”とやらを放っているんでしょうか?「自分じや全然わからないんですけど……。それと陛下の言動と何か関係があるってことですか?」汗、「はい。乙女の芳香は異性や魔物を引きつけるという特性があるのです。ですから光魔法の優れた使い手であるエドナを側に付けたのですが……。どうやら人間の男性対策も考慮しなければならないようですね」神殿騎士を護衛に付けましようか、とラルフさんは爽やかに笑つ。ヤバイ。何だか頭痛がしてきた。マタタビみたいなものなのか、どこめかみを押さえる。「ラルフさんは何ともないんですか?」この人も異性には違ひない。年の功で影響を受けないのが、それとも男性として機能しない(ゴメンナサイ)からなのか、今までラルフさんからそういうした類の目で見られたことはないと思う。「でもよく見れば、顔立ちなんかはアレンさんと同様整つているし、中年太りというわけじゃない。むしろ年齢の割には、引き締まつた体つきをしていると思う。会話やエスコートもスマートで、かなり女性慣れしているように見えるのだ。ええ。わたしには耐性がありますから」「耐性と聞いて、わたしは軽く首を傾げる。

ワクチンみたいなものでもあるんだろうか。^br^br^br^br「ラルフ様は先代の“神の器”で、先代の“聖なる乙女”であられたレリア様とは親しくされておいででしたから」^br^br^br^br「いぶかるわたしを見て、エドナが補足してくれた。^br^br「あれ？ じゃあ、アレンさんのお母さんは誰なんだろう？」^br^br“聖なる乙女”は正妃となるはずだから、ラルフさんには別に奥さんがいたのかな？」^br^br「余計に混乱してきたわたしを見かねてか、ラルフさんは衝撃的なことを口にした。^br^br^br^br「アレンはわたしとレリアの間に授かった息子で、陛下はレリアと先代国王の間に生まれた御子です。つまり……」^br^br^br^br「つまり、アレンさんと暴力陛下は異父兄弟！？」^br^br“聖なる乙女”つて、多夫一婦制ですかっ！？」^br^br「全然“聖なる”じゃないよー。^br^brヒクヒクと口元を引きつらせ、わたしの意識はそこで途切れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2152w/>

サンセファールの聖なる乙女

2011年10月9日23時25分発行